

# 3 高等部におけるキャリア発達支援のポイント

- 「社会生活能力の確立」と「自己選択・自己決定力」の育成が目標。
- 実地的な「働く力」や「生活する力」を実体験をとおして身に付ける。
- 進路先を決めることが目標ではなく、生涯にわたって成長(キャリア発達)できるようにすることが大切。

## 1 実際の社会生活で通用する力を付けることが大切

### ■ボトムアップ(底上げ型)教育とトップダウン型(目的指向)型教育

\* 高等部段階においてはトップダウン型教育の発想を大切にした指導が求められます。

ボトムアップ型教育	トップダウン型教育
<p>◆買い物</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1円が10個で10円、10円が10個で100円という具合に指導し、数が数えられるようになったら買い物ができる</li> </ul> <p>◆就労</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・手先が器用でなければ仕事ができない</li> <li>・挨拶ができなければダメ</li> <li>・数が数えられなければ就労できない</li> </ul> <p>◆抽象的、観念的、応用がきかない</p>	<p>◆買い物</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お金の計算ができなくても、500円玉1個持っていけば、ハンバーガーは買える</li> </ul> <p>◆就労</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・その人に合う仕事を考える</li> <li>・できない部分に関して、どのような代償手段を考えれば仕事ができるようになるかを考え、指導を行う</li> <li>・ことばで挨拶できなければ、他の方法を考える</li> </ul> <p>◆具体的、実地的、応用がきく</p>

【参考：「LD(学習障害)の人の就労ハンドブック」梅永雄二 著】

高等部段階では、働く力を育てるというよりは、実際の社会生活の中で通用できるように、働く力を高め、確かなものにしていくことを考える必要があります。したがって、学校でできることを目標にするのではなく、実際の社会生活でできることを目標に置かなければなりません。

つまり、高等部段階においては、できないことをできるようにするというよりは、できないことがあった時はどう対処すれば良いかという現実的な対応を学ぶ段階とも言えます。そのため、小・中学部で指導しなかったことを高等部になってから教えても、社会生活で通用するということまで育てることが困難です。

各学部段階における系統的な見通しをもった指導の積み重ねが重要なのです。

## 2 卒業後の生活を意識した指導・支援 ～ 地域や関係機関との連携 ～

### ■生涯にわたって発達を支援する視点

学校生活は、生涯の生活の中の一つに過ぎません。卒業時の進路先もその生徒のライフステージの一つに過ぎないのです。障害者自立支援法の施行等により、障害のある人の自己選択・自己決定や主体性がより強く求められています。卒業後にも、生徒が自分の力でより良い方向に歩み続けていくことができるように、地域での支援体制を整えたり、生徒自身の力を高めることが大切です。

特別支援学校には、寄宿舎で生活している生徒や遠方から通学してくる生徒が多く、自分の出身地域で生活する機会が少ない場合が多くあります。

現場実習等では、卒業時の進路に結び付くことを想定し、家庭からの交通機関や、利用できる支援サービス等を予め知っておくことが大切になります。社会生活に円滑に移行するためにも、中学部以上に地域社会や関係機関との連携が求められます。

## 3 より良い人間関係をつくることを教える

### ■ソーシャルスキルトレーニング

ソーシャルスキルトレーニングとは、社会的場面での適切なふるまい方を体験し、自分に合った方法を見つけ出す指導方法です。ねらいに合ったゲームやグループ活動などを通して、その時どのようにすればいいのかを考え、経験して身に付けていきます。

社会の中で自立した生活を行うためには、より良い人間関係を作ることが最も大切です。離職原因のトップは人間関係に関係することです。より良い人間関係を形成するためには、相手が不快な思いをしない態度やマナーを教えることが大切です(【資料8】)。

【資料8】 ソーシャルスキルトレーニング(p.74参照)

## 4 高等部段階での「働くこと」の指導のポイント

### 実践例紹介 ⑤



多くの学校では農作業を作業種目に取り入れています。農作業には、多くの要素の作業が入っているため、一人一人の実態に合わせた作業に取り組みやすい利点があります。



カードを印刷し、製品を10枚ずつに並べる作業をしている生徒。手順や補助具を工夫することで、作業量を自分で確認させたり、見通しをもちやすくすることができます。



作業日誌を書いている生徒。書くこと自体が目的ではありません。今日の作業を振り返ったり、次の目標を確認できるような日誌になるよう支援することが大切です。



窯業の作業学習の製品。完成度の高い製品であれば、高い値段でも買ってもらえます。利益を出すことが目的ではありませんが、生徒の頑張りが正当に評価されるような売れる製品を開発する必要があります。



高等部の作業学習では、販売活動も大切にする必要があります。販売によって、自分の製品が売れる喜びや、他の人と接するためのマナーも学ぶことができます。



校内実習中に昇降口に設置されたタイムカード。実習中は毎日自分で押して管理します。タイムカードは勤務状態を記録する大切なものです。確実に操作できるようにします。



実習の報告会で、自分が行った事業所等の様子や作業について報告しています。身近な友だちや先輩の仕事の様子を聞くことは、進路先を決める大切な情報の一つです。



一般就労を目指して会社で実習を行う生徒を対象にした事前学習の資料。働くために必要な項目を並べ、作業学習や前回までの実習で課題とされたことを、数値化し、グラフで表しています。自分ががんばらなければならない課題は何かを知ることで、今回の実習の目標を自分なりに考えられるよう支援しています。

### (1) 現場実習や実際の経験ができるだけ多く積む

学校では問題なくできている生徒であっても、実際に実習に出してみると思いもよらない課題があることに気付かされることがあります。また、その逆に学校では作業に意欲を示さない生徒が、実習では予想以上に働くこともあります。同じ職場での実習を何度か繰り返したり、様々な職場を多く経験したりすることで、生徒自身が自分の適性を知ったり、「働くこと」への実際の能力を身に付けたりすることができます。

### (2) 「作業学習」の質を高める

高等部の教育では、作業学習を中心とした教育課程が組まれている場合が多いです。したがって、作業学習に対する考え方や内容が、高等部生活全体が充実したものになるかどうかを左右します。作業学習の質を高めるためのポイントを以下にあげます。

#### ① 労働性の高い作業学習

楽しい作業や遊び感覚の作業であっては働く力は身に付けられません。良い製品を作るためには、「真剣さ」や「正確さ」が必要です。品質の高い製品を多く作る、売れる製品を作るなどと目標を高くもつことが労働性をあげるコツです。

#### ② 目標のある作業学習

生徒に意欲をもたせるためには、はっきりとした目標が必要です。納期を設定したり、販売会を企画するなど、働くことの必然性を生活の中に位置付けます。

#### ③ 自分の力でできる作業学習

自分の力で製品を作り上げたという喜びがあってこそ作業に意欲的に取り組みます。生徒が一人で、品質の高い製品を作るためには、教師の工夫が大切です。工程を細かく分析し、生徒の能力や特性に合わせて分担させたり、補助具を作成したりします。横にびったりついたり、いちいち声をかけたりしなくてもよいように、一人でできる状況を作ることが大切です。

#### ④ 見通しのもてる作業学習

生徒自身が、今日の一日の作業の流れや、当分の作業の見通しをもって作業に取り組めるようにすることが大切です。見通しとは、どれくらいやれば終わりという量的なものだけでなく、自分の今やっている作業が全体としてどんな意味をもっているのかという意義的なものも含まれます。

### (3) 「実習」と「作業学習」との関連性を明確に

作業学習が現場実習に発展し、現場実習で得た課題を作業学習で再度指導し、より一層の定着を図るという関連性が大切です。そのためには、作業学習が、実際の働く場に近い作業内容と、緊張感や真剣さのある活動になっている必要があります（【資料9】）。

【資料9】 実習の評価と巡回指導のポイント(p.75参照)

# 4 各障害の特性に応じたキャリア発達支援のポイント

- 特別支援学校は複数の障害種に対応した教育を行うことが求められる。
- 障害の程度や種類にかかわらず、育てたい力や目標は基本的には同じ。
- 障害の特性に応じた指導・支援は基本だが、障害の種類にこだわるのではなく、一人一人の状態やニーズに合わせることを大切にする。

## 1 自閉症の児童生徒に対するポイント

### ■ 構造化とはできる環境を整えること

状況を理解しやすい、あるいは見通しの立ちやすい安心できる環境を作ること「構造化」と呼びます。自閉症のある子には、自分で判断して行動できる手がかりを示したり、余分な刺激を取り除いたりする構造化は不可欠な支援です。

<構造化を行うと……>

「構造化」された環境 …… 理解しやすい。混乱や不安を感じない。パニックをおこさない

「受容性コミュニケーション」の力が高まる …… 教師の指示や課題を受け入れることができる

「自分で」「自分から」活動できる …… 自立性の獲得

求められていることが理解できるので「選択」「正しい応答」ができる

楽しい、できた、わかったという成功体験 …… 自尊心や自信が育つ

<構造化の例>

- ①物理的構造化：どこでするのか（場所の意味）をわかりやすくする
- ②スケジュールの構造化：いつ何を、がんばったら何がある（活動や行動の時間・流れ）をわかりやすく示す
- ③作業の構造化（ワークシステム）：何を（どの課題）、どれだけの量、終わったら何があるかをわかりやすく示す
- ④視覚的構造化：何を、どのようにするかを見てわかるようにする
- ⑤ルーティン化：（いつも）～したら、つぎに～する、習慣化した流れをくむ

### ■ 「ジョブコーチ」と「ジョブマッチング」

ジョブマッチングは、ジョブコーチの基本的な考えの一つです。ジョブマッチングには以下のような視点があります。

- ①職場全体とのマッチング
- ②仕事とのマッチング
- ③人的環境とのマッチング
- ④労働条件とのマッチング など

仕事とのマッチングに関しては、既存の仕事に自閉症の人をあてはめようとするだけでは、適切なマッチングは困難です。一人一人の特性に合わせて、苦手な仕事の一部分を担当の仕事から外す、得意な小さな仕事を集めて担当の仕事構成する、一つの仕事を複数の人と担当する、今まで行われなかった仕事を見つけて新たに仕事を作り出す等の工夫が必要です。

自閉症の人にとっては幅広い内容で状況判断しながらの仕事よりも、一つの作業を繰り返して行う仕事の方が適していることが多いです。全ての業務ができなければ就職できないと考えず、できることを生かして就職に結び付くように支援することが大切なのです。

### (1) 環境を整えることが支援のはじまり

特別支援学校に在籍している自閉症のある児童生徒の多くは中・重度の知的障害を併せもっています。そのため、ことばの獲得や基本的生活習慣の習得が難しかったり、パニックや行動面での課題が多く見られたりします。

自閉症の児童生徒に対しては、一人一人に合った形で、環境を構造化し、見通しをもてるようににすることが、自閉症の児童生徒の精神的な安定や受容的コミュニケーション能力を高めるためのポイントとなります。精神的な安定のないところでは、どんな学習も身に付けられないのです。

### (2) 自閉症の児童生徒は「働く力」をもっている

特別支援学校（知的）を卒業して、企業就労している自閉症者373名に対する調査結果（上岡，2004）では、勤続年数5年以下が全体の70%，6年から10年が19%，11年から20年が10%であり、知的障害が重度の自閉症者でも勤続10年以上の者が2名いたことを報告しています。一方で知的な遅れを伴わない高機能自閉症等の人たちは就労の継続が難しいことが指摘されています。

つまり、ことばを話せなかったり、コミュニケーションをとることが難しい自閉症の児童生徒であっても、本人の良さ（真面目さ、正確さなど）を生かし、適切な環境を整えることで、一般就労することが可能なのです。

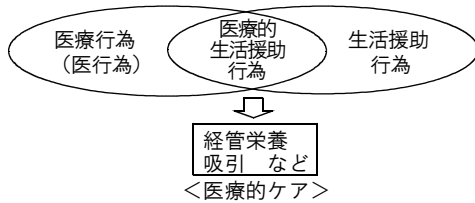
### (3) 「働く力」を高めるには本人の特性を生かすことと周囲（環境）との調整を図ることがポイント

自閉症は、能力や興味に偏りがあるため、一人一人の特性に応じて困難なことや苦手なことを回避し、個人のもつ興味や長所を仕事に生かし、職場での適応を図る（ジョブマッチング）ために、実際の場所で周囲との環境調整（障害理解を図ることを含む）や直接支援をする「ジョブコーチ」を行うことが、就労に向けたポイントになります。

## 2 医療的ケアの必要な児童生徒に対するポイント

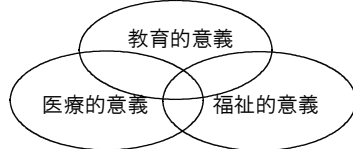
### ■ 医療的ケアとは

経管栄養・吸引などの日常生活に必要な医療的な生活援助行為を、治療行為としての医療行為とは区別して「医療的ケア」と表現しています。



### ■ 学校スタッフにより医療的ケアが行われることの意義や必要性

<医療的ケアの意義>



#### ○ 教育的意義

- ・教育条件の改善
  - 「訪問」から「通学へ」、授業の継続性
  - 家族の都合や体調不良による欠席の減少
- ・より本質的な教育定義
  - 教育内容の深まり
  - 教員と生徒の関係性の深まり
- ・教育的効果
  - 子どもの精神的成長が見られ母子分離ができた
  - 様々な活動に参加できることで表情が豊かになった
  - 発達に応じた自立心が芽生えてきた

#### ○ 医療的意義

- ・学校でも必要に応じて実施されることにより、誤嚥や脱水を防いだり、呼吸困難の防止や軽減が可能になり、健康・生命が維持できる
- ・学校スタッフが医療的ケアに関わることをとおして、適切な医療的配慮と対応が向上した。
  - 児童生徒の急変や死亡が減少した報告もある

#### ○ 福祉的意義

- ・母親の負担の軽減
- ・兄弟姉妹を含めた、家族のQOLも守られる

【参考：「医療的ケア研修テキスト」松石豊治郎ら編より】

### 実践例紹介 ⑥



目の動き（視線）で意思を伝える生徒。2枚の絵カードを提示して、どちらのカードを見ているかや表情で意思を確認することで、生徒の意思を表現する力を育てます。



ラジカセにつないだ補助スイッチを操作して、朝の会の進行をする生徒。わずかな腕の力でスイッチが入るよう工夫されています。生徒のできる活動を大切に支援です。

【資料10】インリアルアプローチの紹介(p.76参照)

### (1) 今のその状態がその子にとっての健康な姿

医療的なケアは、病気を治すための医療行為ではなく、生活に必要なケアです。医療的なケアが必要な子どもたちは、病気の子どもではなく、障害はあっても、その子にとっての健康な状態なのです。配慮は必要ですが、一人の子どもとしてありのままに受け入れ、発達に沿った指導や支援を行うことの必要性は、他の児童生徒と全く変わりません。

### (2) 医療的ケアの必要な子どもたちのキャリア発達とは

キャリアとは、ライフステージに応じて求められる力とその積み重ねという意味です。医療的ケアの必要な子ども達も、日々その子どもなりに発達します。また、家族の状況も変わっていきます。医療的ケアの必要な子ども達にとっては、「働くこと」を主眼においた指導・支援というよりも、本人及び家族がライフステージに合わせて「よりよく暮らすこと」を目的としたキャリア発達支援を考える必要があります。

### (3) キャリア発達支援のポイント

医療的なケアの必要な子どもが学校生活を送るために、最も大切なことは「安全や生命を守る」配慮です。医療的ケアの必要な児童生徒に対しては、校内委員会を設置し整備された校内体制の中で、医療機関等と連携しながら教育を行います。医療的ケアの必要な子どもたちのキャリア発達支援は、子どものQOL（生活の質）の向上がポイントになります。支援にあたっては、児童生徒本人だけでなく、児童生徒を支える保護者のQOLについても合わせて考える必要があります。

#### <指導・支援のポイント>

- 呼吸状態を改善し、身体をリラックスさせ心地よい状態を多くする
- 子どもの微弱な表情やしぐさの変化から本人の意思を受け止め適切にフィードバックする(【資料10】)
- 人とのかかわりを大切にする
- 表現手段を育てる
- 「指導仮説」(具体的、客観的に評価できる指導のめあて)をもつ

#### 《留意点》

- ・子どもの健康や発達の状況を的確に把握すること
- ・看護師や保護者との日常の連絡を大切にすること
- ・保護者への支援も常に念頭に置くこと
- ・ケアの方法や適切な環境の整備等の引継ぎを確実にすること

#### <キャリア発達支援のポイント>

- その子に合ったケアの方法や教室環境等について明らかにする
- 保護者の負担を緩和する支援の方法を保護者と一緒に考える
- 徐々に母子分離できるように支援する
- 土・日や長期休業や地域生活での過ごし方を支援する
- 生活年齢にふさわしい体験ができるように支援する
- 卒業後に利用する施設の選択や体験を支援する
- 卒業後にも利用できる支援のネットワークをできるだけ充実させる

\*医療的ケアの必要な子の卒業後の生活への支援は、QOLを守る・向上させる観点から小学部から段階的、継続的に行う必要があります。

### 3 発達障害の児童生徒に対するポイント

#### ■発達障害とは

発達障害とは、LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）、高機能自閉症（アスペルガー症候群を含む）などの、その症状が発達期に現れ、その原因が何らかの脳機能の障害であることが推察される障害を呼びます。

#### ■小・中学校における早期発見、早期対応を支援する

発達障害の子ども達は、苦手なことは、普通の教え方や接し方では身に付けることができないため、その子に合った、その子にわかるような方法で支援することが大切です。発達障害の子ども達に対して「いつかできるように」「もう少し様子を見よう」などと、問題を後回しにすることは、二次的な障害を引き起こしたり、学習面での遅れを招くこととなります。

小学校に入る前、または小1の早い段階（夏休み頃）から適切な対応を取ることで、二次的な障害の防いだり、学力の低下を防ぐことができると言われています。インクルーシブな教育の観点からも、子ども達は地域の学校で共に学び共に育つことが求められます。発達障害の児童生徒の早期発見と適切な対応を支援し、地域の学校で学べるようにすることが、特別支援学校の大切な役割なのです。

#### ■二次的な障害の予防と改善が大切

頑張っても、効果が出ない、認めてもらえない環境に長く置かれていると、子ども達は自己肯定感を味わうことができず、次のような二次的な障害が見られるようになります。

##### <二次的な障害の例>

反抗、挑発、他傷、自傷、不登校、ひきこもり、拒食、過食、異食、強迫行為、非行、不安、抑うつ、対人恐怖、自殺念慮、被害妄想、不定愁訴、腹痛、頭痛、食欲不振、嘔吐、チック、肥満 など

特別支援学校に入学してくる発達障害の児童生徒の多くがこのような二次的な障害をもっています。一次的な障害（発達障害）への対応の前に、二次的な障害を改善することが必要な場合も多くあります。二次的な障害の原因は、適切な環境やかかわり方をされなかったことですから、適切な環境と支援を行うことで、児童生徒の自己肯定感を徐々に高め、二次的な障害を改善することが可能です。

発達障害の児童生徒にとって、最も大切な支援は二次的な障害を引き起こさないこととも言えます。

#### ■発達障害者支援法

発達障害者支援法が平成17年4月から施行されたことで、発達障害の児童生徒に対する適切な支援を行うことが定められました。これにより、地域で一貫した支援が行われるように、各都道府県等において発達障害児支援連携協議会や発達障害者支援センターが設置され、連携した支援が行われるよう進められています。

##### <発達障害者支援センターの仕事>

- 相談支援 … 電話、または来談での相談業務
- 発達支援 … 言語、心理の専門家からのアドバイス
- 普及・啓発 … 発達障害に関する研修会等
- 就労支援 … 就労に関する相談や紹介 など

#### (1) 発達障害の児童生徒の増加

大きな知的な遅れがないため、通常の学級に在籍し、高等学校に進学する機会が多いのですが、学校不適応や社会性の問題のために、特別支援学校への入学が近年増加しており、発達障害に対する適切な対応が課題になっています。

#### (2) 各学部段階での支援のポイント

##### <小学部>

小学部の段階で、入学してくる児童は、多動や衝動性等が著しい場合や、自傷・他傷などの問題行動、いじめ、不登校など、行動面や社会性の面で大きな課題のある子がほとんどです。適切な環境でわかるように教えてもらえなかった未学習や誤学習が原因なので、落ち着いた環境の中で一つ一つ丁寧に教えることで、状態が改善されます。

支援のポイントは、必要なことを教え直し集団生活に適應できるようにすること、基礎学力の向上を図りできるだけ原籍校や通常の学級に戻れるようにすること等です。

##### <中学部>

中学部の段階で、入学してくる生徒は、行動面や社会性の課題の他に学習面でも課題がある生徒がほとんどです。長年にわたって、その子にとって適切でない環境に置かれてきたため、自尊心や自己肯定感が低下しています。しかし、中学部段階では子どもらしい素直な感情や無邪気さが残っていることが多く、再学習は十分可能です。

支援のポイントは、生徒の自己肯定感を向上させるよう、成功体験を多くもたせること、自己理解をすすめること、苦手なことにも前向きに取り組めるようにすること、将来への具体的な夢を描くことができるようにすること、進路は本人の希望を大切にしながら、幅広く可能性（高校等への進学や就職など）を考えること等です。

##### <高等部>

高等部の段階で、入学してくる生徒には、学習面の課題が多い生徒と行動面や社会性に課題が多い生徒、またその両方に課題のある生徒がいます。共通した課題には、コミュニケーション能力や社会性の弱さが見られます。また特別支援学校への入学に抵抗感をもっている生徒や保護者も見受けられます。できる活動も多いのですが、確実さや丁寧さにかけて、ムラがあります。生徒指導上の問題や、様々な課題が固定化していて、改善には時間がかかる場合が多く、社会生活の予後も決して楽観視できません。

支援のポイントは、生徒の自尊心を大切にしながら、自己理解をすすめること、現場実習を多く経験させ、実際の体験の中で自分の適性や夢を考えさせること、トラブルへの適切な対応や予防策を教えること、関係機関と連携しながら移行支援を十分に行うこと等です。

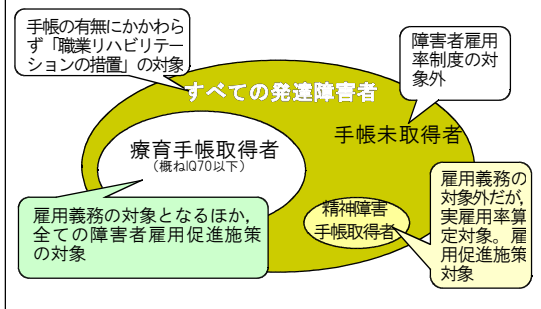
## ■就労支援サービスと手帳の取得

「障害者の雇用の促進等に関する法律（障害者雇用促進法）」が18年4月に改正されたことで、療育手帳等をもっていない発達障害者も、ジョブコーチ支援やトライアル雇用事業を受けられるようになりました。

しかし、現時点では療育手帳を持たない発達障害者は、障害者雇用率制度の対象になっておらず、事業主に雇用義務はありません。また、療育手帳を持っていないことで、障害基礎年金を受給することができず、経済的な基盤の弱い発達障害者も多くいます。

療育手帳等の障害手帳の事業は、都道府県で行われています。そのため各自治体ごとに手帳交付については手続きや基準が若干異なります。発達障害者の中には、精神障害者手帳を取得している方もいますし、療育手帳も成人になってからでも取得が可能です。

手帳の取得は、本人の自由ではあるのですが、手帳制度自体を知らなかったり、申請をあらかじめいたりすることも多いので、手帳を得ることで受けられる就労支援サービスや福祉的なサービスの情報を本人や保護者に伝えることも将来の生活に向けた大切な支援の一つです。



## ■本人の障害受容や自己理解を進める

発達障害のある人自身が、自分の経験を振り返って手記をまとめたり、障害の特性をポジティブにとらえて、前向きに生きていくための視点を示した本がいくつか出版されています。学校の図書室や学級に置いたり、本人が周囲の友だちとのかかわりに悩んでいるときなどに紹介してみてもいいかもしれません。

### <参考になる図書（例）>

- ・「あなたがあなたであるために ～自分らしく生きるためのアスペルガー症候群ガイド～」吉田友子著 中央法規
- ・「どうして私片付けられないの？ ～毎日が気持ちいいADHDハッピーマニュアル～」櫻井公著 大和出版
- ・「愈けてなんかない！ ディスレクシア～読む・書く・記憶するのが困難なLDの子どもたち～」品川裕香著 岩崎書店
- ・「健康ライブラリー イラスト版」講談社 ＊シリーズ物です各障害ごとにその分野の第一人者の方が、特性や支援のポイントだけでなく就学、就労と幅広い内容を図を多く用いてわかりやすく解説しています。



### <社会参加と自立を促すために>

- 自分のことは自分で確実にできる基本的な生活習慣を確立する
- 周囲の人を不快にさせないマナーや常識を身に付ける
- 周囲の人と協力したり、責任を果たすことを大切にする

## (3) 各障害の特性に応じた支援のポイント

### <高機能自閉症、ADHDへの支援>

高機能自閉症とADHDの診断基準は明確に分かれているものの、その状態像は、似通っている部分が多く、年齢が上がれば上がるほど専門医でも診断が困難である言われています。両者に共通の社会生活や学校生活での課題は、周囲とのトラブルを起こしやすいことです。

年齢が上がるにつれ、本人も、自分が周囲とうまくやっけていけないことを自覚するようになり、自分なりの解決を試みることもありますが、多くは失敗し、他者へ責任を転嫁したり、被害妄想的になったり、ひきこもってしまうことがあります。青年期以降においては、鬱病や統合失調症等の精神疾患になることもあります。

支援のポイントは、できないことや良くない行動を「本人の落ち度」として責めないこと、できないことには代替手段や補助手段を積極的に活用すること、障害の受容と自己理解をすすめること、ソーシャルスキルトレーニング等を用いながら、根気よく、良い行動が増えるように支援すること、自分からも周囲の人に理解や協力を求められるような態度やスキルを身に付けること等です。

就労にあたっては、職場の理解が不可欠です。実習や初めての就職先で失敗してダメージを受けると立ち直れないこともあります。本人の困り感に寄り添ったきめ細やかな支援が、実習等では求められ、移行支援もジョブコーチ等を活用して十分に行う必要があります。

### <LD(学習障害)への支援>

LDの困難さは、教科学習だけでなく、様々な生活面や仕事面においても見られます。例えば記憶に課題がある場合は、同時にいくつもの仕事をこなすことができなかつたり、読み・書きに課題がある場合は、マニュアルを理解できなかったり、注文を書き間違えたりすることがあります。また、手指の巧緻性に課題がある場合はレジスター等の機械の操作や精密部品の組み立てを素早くできないなどの課題があります。しかし、見た目や日常の行動からは、そのような困難さが感じられないため、LDの人は、周囲から「努力が足りない」「さぼっている」と見られがちです。本人も自分の努力がたりないのだと懸命に努力しますが、結局はうまくいかず「自分はダメな人間だ」と自己評価を下げることが多いのです。

支援のポイントは、できないことや苦手なことは代替手段や補助手段を使うことを教えること、苦手なことは予め相手に伝え、その代わりにこれならきちんとできます等と自己表現することを教えること、それぞれの場で相談できる人を探したり、円滑な人間関係を築けるようにしたりすること等です。

就労に当たっては、いくつかの仕事を経験させ、その中から本人の希望する仕事を選ばせるようにすることや、職場の人に本人の特性を十分に理解してもらえるように働きかけること等が必要です。